互いに認め合う学級集団づくり

―自己理解と他者理解を深める教育実践を通して―

石井　孝典
児童生徒支援コース

１．　研究の目的

近年、学校教育では協働的な学びが重視されている。その成立には、児童が安心して意見を表明できる心理的安全性が不可欠である。本研究の対象である小学校３学年は、仲間集団への帰属意識が高まる一方で、他者から自分がどのように見られているのかという不安が生じる時期でもある。そのため、自分の考えや意見が他者と異なることに不安を感じやすくなるのではないかと考えた。このような「被異質視不安」は、異質な存在を拒否する「異質拒否傾向」の高さと関係があることが先行研究で示されている。そこで本研究では、小学校３学年の児童を対象に、多様な他者が存在してよいと感じられる学級風土の醸成を目指し、その基礎となる自己理解と他者理解を段階的に深める全９時間のプログラムを実施した。

２．基本的な考え方

（１）自己理解について

児童の自己理解を深めるためのプログラムを検討するにあたり、小島・片岡（2017）の自己理解支援の段階を参考にした。小学校中学年は自己肯定感が揺らぎやすく、劣等感を抱きやすい時期であるため、まず「自分のよさ」を実感できる活動を重視した。次に、多様な自己への気付きの中でも、特に自己の感情理解を扱うこととした。感情に焦点を当てたのは、能力差に関わらず全児童が参加しやすい内容と考えたためである。最後により自己理解を深めるため、他者から見た自己像に気づく活動を行うこととした。以上のこと踏まえ、自己理解を深める授業として①自分のよさへの気付き、②多様な自己への気付き、③他者からのフィードバックによる自己理解の拡張、の三段階に沿った授業を計画した。

（２）他者理解について

先行研究より、他者理解を「他者の感情や考えを理解し、他者の立場に立って行動を選択できる」ことと定義した。また、溝川・子安（2015）は、他者理解を深めることだけではなく、共感性も育むことで、子どもが向社会的な他者との関わりができるようになるとしている。よって、他者理解を深めるためのプログラムを❶他者の感情や考えを理解する、❷他者に対する思い込みがあることに気付く、❸相手の話に耳を傾け理解しようとする態度を身に付ける、という段階に分け、系統的に学んでいくよう計画していくこととした。

３．研究の実践

（１）対象　茨城県Ａ小学校３年１組 33 名

（２）調査期間　2025 年５月９日～2025 年 11 月 28 日

（３）効果測定の方法

効果測定には学級異質拒否傾向尺度（深沢 2019）の４項目を用い、４件法で回答を求めた。また自由記述による振り返りアンケートも併せて実施した。

（４）実践内容

前期４時間、後期５時間の計９時間の単元構成とした。前期は、絵本などを活用した自己理解の喚起、ワークシートを使った自分のよさや感情の理解、他者からみた自己像に気付くグループワークなどを通して、自己理解を深めていけるよう計画した。後期は ALT の話を聞き、異文化理解を深める授業などを行った。また、身近な題材の道徳の授業で般化を図った。これらの活動を通して、他者に対する思い込みに気付き、相手の話に耳を傾けようとする態度を育成することを図った。

４．結果

（１）尺度調査の結果

５月と 11 月に質問紙調査を行い、学級異質拒否傾向尺度を用いて平均値を対応ある t 検定で比較した。その結果有意差は見られなかったものの、尺度全体の平均値は上昇しており、異質拒否傾向の抑制には至らなかった。

（２）研究結果の考察

質問紙調査の結果は想定と異なるものとなった。その理由として、①質問紙の語句理解が不十分で、事前は実態より肯定的に回答した可能性、②授業の導入や交流の時間が十分でなく、自分事として捉える機会が限定されたこと、③多様性の価値を実感する活動が不足していたこと、④異なる意見に向き合うための対人スキル育成が不十分であったこと、の四点が考えられる。

（３）振り返りアンケートの自由記述について

質問紙調査の結果では全体の平均値が増加する結果となったが、他方で、振り返りアンケートの自由記述では次のような肯定的な変化が見られた。まず、教室に多様な他者が存在することを「知らないことを教えてくれるからよい」「同じ性格ばかりだとつまらない」と価値づける記述が増えた。また、考えの違う他者とのかかわり方についても「相手の気持ちを考える」「決めつけずに話し合いたい」といった態度の芽生えも確認された。これは授業で扱った「思い込みへの気付き」が、実際の関わり方の変化につながったことを示唆している。

５．成果と課題

成果として、一部児童に行動変容が見られた点が挙げられる。異質拒否傾向が大きく低減した児童 A は、当初は意見を言えなかったが、他者の考えを聞く活動を重ねる中で発言が増えた。単元末の振り返りでは「人と自分をくらべなくていい」と記述していた。また、他者理解を促す素材として、意外性や身近さをもつ題材が有効であることも示された。

今後の課題としては、①例示や体験的理解の充実、②授業構成の改善、③多様性の価値を実感できる活動の設定、④意見の違いに向き合うための対人スキル育成、の四点が挙げられる。

主な引用文献

小島道夫 ・片岡美華（2017）　発達障碍者のセルフアドボカシー 金子書房

溝川藍・子安増生（2015）　他者理解と共感性の発達　心理学評論　58 巻 3 号　360-371